

障害児のおむつ代支援へCF



⑤重い知的障害と身体障害がある武田梓希さん(左)。5人きょうだいの長女で、母の栄利さん(右)が抱く0歳の末っ子はいつもかわいがっている
⑥清田リハビリセンターのおむつ置き場。利用者が持参したものを保管している
(いずれも北波智史撮影)

市町村のおむつ給付 障害者総合支援法に基づいて市町村が行う日常生活用具給付等事業の一つ。自己負担分を除いて、国が最大2分の1、北海道が同4分の1を補助し、残りを市町村が負担する。支給額や対象者は市町村が定める。市町村が支給する額はおおむね6千〜1万2千円と幅がある。札幌市は、国や道の補助を受けず、約40年前から独自の支給事業を行う。「当事者の声を取り入れて使い勝手を良くしてきた」(障がい福祉課)といい、要件を満たす身体障害者、知的障害者に加え、全国でも珍しく精神障害者も対象としている。

「多い時期は1日10回くらいおむつを替えていた。尿の量が少なく、『もうちょっといけるかな』とおむつ代を切り詰めて」。恵庭市の看護師武田栄利さん(43)は話す。5人きょうだいの長女で真駒内養護学校高等部1年の梓希さん(15)は9番く防水シートも必要だった。恵庭市は月8858円分のおむつを基本1割の自己負担で現物支給するが、それでは足りなかった。「かわいくてかかって生活はどうかかわりだ。おむつの収納棚を見ては『あとどれくらいもつかない』と考えていた」と振り返る。

札幌の通所施設運営「あしすと」呼びかけ

障害のある子どもは成長しても紙おむつを使い続けることがある。自治体の支援を受けても不足する家庭は多く、近年の物価高もあって経済的負担は重い。こうした家族を支えるため札幌市の障害児通所施設は、おむつ代を募るクラウドファンディング(CF)を始めた。子どものお尻を包むおむつになぞらえた「ももの皮プロジェクト」だ。

物価高 自治体給付で足りず

梓希さんはトイレで排せつできることが増え、現在は支給分で足りる。ただ、いつも使う20枚入り1375円のおむつが値上がりすることになった。価格はまだ分らないが、支給分の金額は変わらないため枚数が減る。「たくさん必要な家庭は不安だろう」と武田さんは話す。恵庭市は物価高騰を受け支給額の引き上げを検討したいとしている。

「ももの皮プロジェクト」を始めたのは、梓希さんが通う札幌市清田区の清田リハビリセンターを運営する一般社団法人あしすと。同センターは身体と知的の重度障害のある子供らの通所サービスを提供し、現在は石狩管内の2〜17歳の約50人が通う。作業療法士や看護師らとの遊びや療育を通じて、運動や認知、生活機能の向上を図っている。

利用者のうちおむつを使う約30人は、自宅から持参している。赤ちゃん用より大きいおむつは1枚60〜100円ほど。半額程度の尿取りパッドをおむつの中に敷くことで節約する。

札幌市は基本1割の自己負担で月6500円分までおむつを支給する。しかし同センター利用者

の平均的な出費は、支給分を除き月1万2千円ほど。同法人理事の田中聡美さん(58)は「厳しい家計の中でおむつを持参してもらっているのは心苦しい。少しでも家計の助けになれば」とCFを始めた狙いを説明する。

CFは330万円の年間目標額を掲げ数回に分けて募る。今は2回目の募集中。支援対象は清田リハビリセンターの利用者約30人で、おむつと尿取りパッド、お尻ふき1年分だ。初回は15万5千円が集まった。

家族の悩みは購入費に限らない。武田さんは小学生の梓希さんのおむつを替えるながら「はずれているはずの年齢なのにと思うこともあった」と胸の内を打ち明ける。田中さんは「CFを通じて、成長してもおむつを使う子どもたちのことを知ってもらい、地域社会で支えられれば」と願っている。



CFの締め切りは30日。申し込みはCAMPFIREのサイトQRコードから。協賛企業も募っている。

問い合わせは同法人、電話011-375-6388へ。

(山田芳祥子)